

Tiara

看護情報誌ティアラ 2025 年 6 月

Nursing 最前線●

独立行政法人地域医療機能推進機構
東京山手メディカルセンター

ストーマ外来や

特定行為を取り入れ

専門性を極めることで

患者さんを支える看護を

SCOPE

第55回日本看護学会学術集会ランチョンセミナー

(共催/ニプロ株式会社)

通信機能付きバイタル機器を用いた

データ通信サポートシステムの

看護業務への効果と課題

TOPICS

笑いをベースにした

コミュニケーションが

医療現場の課題の解消に

Wマコトのコミュニケーション術



ストーマ外来や 特定行為を取り入れ 専門性を極めることで 患者さんを支える看護を

独立行政法人地域医療機能推進機構 東京山手メディカルセンター

東京山手メディカルセンターは東京都区西部の急性期病院として機能するなか、特に大腸肛門疾患について先駆けとして取り組みを進めてきました。1960年に大腸肛門病センター、2006年には炎症性腸疾患センターを開設し、全国から患者さんを集めています。看護部もそれに合わせて人材を育成。専門性を身につけた看護師たちがストーマケアや皮膚・創傷ケアにおいて意欲的に力を発揮しています。その活動について話を聞きました。



1

大腸肛門疾患の患者さんを 長年にわたり支えるストーマ外来

東京山手メディカルセンターにストーマ外来が誕生したのは1991年。当時は認定看護師制度^{*1}がなく、1986年にETナース^{*2}一期生となった看護師が活動をスタートさせました。そして現在その外来を担うのは副看護部長で皮膚・排泄ケア認定看護師の積美保子さん。1998年に認定資格を取得し、2000年からストーマ外来の運営に加わりました。

「大腸肛門疾患に力を入れている背景から当センターはストーマ造設患者さんが多く、術後だけでなく継続的なフォローをいかに行うかが課題でした。退院時にしっかり指導をしても、装具の扱いや漏れなどに困って問い合わせたり来院したりする患者さ

んが後をたたない。支援の充実を図るため、週に1日だった外来の実施日を増やすよう病院に働きかけ、実現することができました」（積さん）

2000年以降ストーマ外来は月曜から金曜の週5日間になり、2023年度の受診件数は延べ898件。原因疾患は、多い順にクローン病、大腸肛門管がん、潰瘍性大腸炎、その他となっています。クローン病や潰瘍性大腸炎などの炎症性腸疾患の場合、合併症のリスクも高く、若い年代の患者さんが多いことから受容が進まないケースもあります。「状況に応じストーマ外来から皮膚科医師やリエゾン看護師につなぎ、より専門的なケアが受けられるようにしています。ストーマを理由に患者さんがやりたいことをあきらめずに実施できるようサポートをしたい」と積さん。そのためにも、認定看護師による術前外来



2

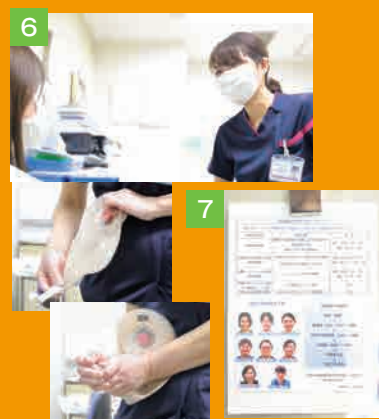


3

1. ストーマ外来は週に5日間。ストーマ排泄指導管理、ストーマ合併症への対応、患者さんの精神的支援、社会福祉制度や装具についての情報提供などを行っている
2. 積美保子副看護部長（皮膚・排泄ケア認定看護師）
3. (左から) 永崎純看護師、児玉尉里看護師

^{*1} 日本看護協会による認定制度で1995年度に創設された。高度化し専門分化が進む医療の現場において、水準の高い看護が実践できる看護師を認定するもの。2020年度からは特定行為研修を組み込んだ新たな制度がスタートしている。

^{*2} Enterostomal Therapistのことで、ストーマケア、褥瘡などの創傷管理、排泄ケアを専門的に行う看護師。ストーマ療法士ともいわれる。日本では1986年から教育が始まり、現在は皮膚・排泄ケア認定看護師に移行したETナースも多い。



4. 毎週水曜に7階東病棟（大腸肛門外科）で実施されているストーマケアカンファレンスの様子。患者さんの課題の解消、装具やケアのチェック方法、新規入院者の情報共有などがテーマになる 5. ストーマ外来は個室を確保。患者さんが安心して話せるようプライバシーに配慮している。室内にはストーマに関する資料や装具がびっしり 6. ストーマ外来では患者さんの困りごとや悩みごとに寄り添いながら、具体的な手技などを交え相談に応える 7. 同センターには2024年度現在8名の特定行為研修修了者がいる

（現在は依頼があった場合にのみ実施）をすべての患者さんに行えるようにしたいと話します。

積さんは、ストーマ外来とともに大腸肛門外科に併設されている排便機能外来（火曜午前実施）も担当しています。「皮膚・排泄ケア認定看護師には幅広い役割があり、役に立てることはやりたいという気持ちで取り組んでできました。これからは認定看護師の育成をさらに後押しし、新たな人材へのバトンタッチも考えていきたいですね」と今後にも目を向けています。2024年6月からは毎週水曜日に大腸肛門外科の病棟でストーマケアカンファレンスを開始。人材育成も着々と進行中のようです。

特定行為を身につけたことで実現した患者さんの利益とタスクシフト

院内には特定行為研修*3を修了し、病棟内で活躍の場を広げている看護師もいます。7階東病棟看護師の永崎純さんとICU・CCU看護師の児玉^{やすのり}さんです。創傷管理関連ほかの区分別研修を修了し、現在はストーマ閉鎖時の陰圧閉鎖療法に携わっています。

「大腸肛門科の病棟で医師の補助をしながら、自分にももっとできることがあるのではと考えていました。知識・技術を習得することで患者さんへのタイムリーな処置が可能になる特定行為研修を知り『これだ』と思いました」と、永崎さんは研修に取り組んだ理由を話してくれました。「初めての処置のときはものすごく緊張しましたが、傷がきれいに治っていく経過をみながら喜ぶ患者さんの姿によかったなと感じます」と充実感を渗ませます。

一方児玉さんは「自分のできることを増やして、

自分も意見を出しながら医師とタッグを組んでスピーディに何かできたらいいなと思いました」と、タスクシフトも視野に入れて研修を受講したといいます。現在はICU・CCU所属なので、永崎さんが処置にあたれないときにフォローしているとか。

2023年度のストーマ造設は122件、閉鎖は17件で、陰圧閉鎖療法が実施されたのは延べ23件。永崎さんと児玉さんが担当したのはおよそ半分に、成果は着実に上がっています。

専門分野に力を入れている同センターでは、それに比例して専門性の高い看護師たちが育ち活躍しています。そして、その成果はそれぞれの現場を守る看護師たちにも確実に浸透しているようでした。



DATA

独立行政法人地域医療機能推進機構
東京山手メディカルセンター

東京都新宿区百人町3-22-1

<https://yamate.jcho.go.jp>

開設 ●1947年 病床数 ●418床

職員数 ●673名 うち看護職員304名
(2025年1月現在)

看護体制 ●一般病棟7：1

日本医療機能評価機構認定病院／東京都災害拠点病院／地域医療支援病院／東京都がん診療連携協力病院

*3 2015年に施行された「特定行為に係る看護師の研修制度」による研修。特定行為は21区分38行為ある。基本的には共通科目に区分別科目を組み合わせて受講する。

第55回日本看護学会学術集会ランチョンセミナー
(共催／ニプロ株式会社)

通信機能付きバイタル機器を用いた データ通信サポートシステムの 看護業務への効果と課題



受講者で埋まった会場

医療DX^{*1}の推進が加速するなか、医療機関ではさまざまな取り組みが模索されています。そして新しい試みの導入には効果の検証が必要。第55回日本看護学会学術集会ではランチョンセミナー「通信機能付きバイタル機器を用いたデータ通信サポートシステムの看護業務への効果と課題」(2024年9月28日 熊本県熊本市・熊本城ホール)が行われました。熊本大学病院の中西智子先生による調査結果についての発表をご紹介します。

産学連携制度を活用した 通信機能付きバイタル機器の評価検討

今回の発表は熊本大学の学術コンサルティング制度による検証結果を活用しています。中西智子先生(熊本大学病院看護部情報担当看護師長／医療情報技師)は「学術コンサルティング制度は、企業などの幅広い課題・要望に対し、熊本大学の教職員が助言や指導、新事業の創出支援、技術調査、課題解決を行う新たな産学連携制度です」と説明し、今回実施した通信機能付きバイタル機器(HN LINE[®]／ニプロ株式会社)に対するコンサルティングの目的について「IoTを用いたバイタル記録の自動化が看護業務の効率化と医療安全面に寄与するかを評価検討すること」としました。また、今回の発表については「HN LINEが有する5つの機能(バイタル／早期警告指示管理、血糖管理、輸液管理、心拍管理、身長・体重連携)のうちのバイタル測定(バイタル／早期警告指示管理)に対する検証部分のみを抽出した」としました。

調査を行ったのは、高度急性期医療を提供するA病院。4病棟の111名の看護師と1万5294名の患者さん(入院期間：2023年5～6月、8～9月)が対象となっています。通信機能付きバイタル機器の利用は初めてで、2023年6月に操作説明会を行い、7～12月にHN LINEを各部署に5台ずつ導入して調査が実施されました。同院では、看護師2名がペアで患者さんを担当しており、検温では1人が測定、もう1人がパソコンまたは携帯端末で記録を行っていま

す。

中西先生は、機器導入前のバイタル値の記録状況、導入後の機器利用率、業務の効率化、業務時間の変化などについての詳細な調査結果を述べ、導入前後に行った看護師に対するアンケート結果についても比較しました。

機器導入による看護師のベネフィットと 患者さんのリスクの可能性

これらの調査結果として、中西先生は「機器の導入によって、記録の効率化と誤入力・入力漏れについて明らかな改善を認めました。また、時間外記録時間の割合が削減しました」と述べました。その一方で、時々発生した通信速度の低下や端末起動エラー、送信／認証エラーなどについては看護師からの改善要望があり、メーカーによって機器やシステムの改良が実施されたことを報告しました。

さらに、中西先生は機器導入による看護師のベネフィット^{*2}と患者さんのリスクについて述べました。

「誤入力や入力漏れが減り、適時記録が可能に。さらに、患者誤認を防ぎ、業務の効率化が図れる。このように看護師にとってのベネフィットは多いでしょう。しかし、ケアの改善が行われないままラウンド時間が短くなった場合には、患者さんの状態判断に負の影響が生じるリスクがあると考えられます」

これを踏まえ、今回調査の対象とならなかった機能の早期警告指示管理にある「早期警告スコア(NEWS)」を活用することによるリスク軽減の可能性にも触れました。

^{*1} 保健・医療・介護を進める各段階において発生する情報やデータについて、業務やシステム、データ保存の外部化・共通化・標準化などを図ることで、国民自身による予防を促進し、良質な医療やケアを受けられるよう社会や生活の形を変えること。



〔座長〕
公益社団法人
熊本看護協会
会長
本 尚美先生



〔講師〕
国立大学法人熊本大学病院
看護部
情報担当看護師長
中西智子先生

最後に今回の調査について、「看護業務効率化取り組みガイド」(日本看護協会)を参考に考察を述べ、効果が認められる評価の視点として、倫理的な視点(バイタル測定中の患者コミュニケーションが容易に)、医療安全(記録の正確性と適時性の向上。患者誤認の削減)、働きがいの視点(看護業務効率化に対する看護師の満足度の向上)、費用対効果(時間外労働時間〔記録時間〕の短縮)を挙げました。また、看護の専門性や法律的、制度的な視点などほかの評価項目と併せて、それぞれの課題についても明確にしました。

中西先生の発表を受け、座長を務めた熊本県看護協会会長の本尚美先生が会場に呼びかけたところ、多くの質問が上がりました。

●同様の機器を使用した記録の取り組みが定着しない現状がある。よい働きかけを教えてください。

中西先生：機器の操作に手間取ったりエラー体験が生じたりするとネガティブな反応につながりやすい。管理者も巻き込んで先導してもらうほか、エラーが起こった根拠を示すことも取り組みに向けた動機づけになるとと思います。

●導入を予定しているが、業務を簡便にすることで看護師のアセスメント能力が下がるのではという危惧がある。うまくバランスをとるにはどうしたらいいか。

中西先生：急変予測、急変対応が一番問題になってくると考えられます。機器で得た情報を活用するという視点からの新たな知識やBLSについてのシミュレーション研修など教育をしっかり行うことが大切ではないかと思っています。

このようなやり取りを受け、本先生は「看護職が限られた人材でその専門性を発揮できる働き方を推進し、質の高い看護を提供し続けるためには、ICTの活用はもう欠かせないものになっています。データを示し、その結果をベネフィットとリスクの視点で考察した中西先生のお話は、参加されたみなさんのIoTの導入・定着を進めるための手掛かりになるのではないかと思います」と講演を結びました。



医療DXによる看護の変化はますます身近になっている。自分たちにどのようにかかわってくるのか受講者の関心は高い



通信機能付きバイタル機器の機能等については動画による解説も行われた



詳細な調査結果についてわかりやすく説明する中西先生



講演の内容を受けて会場に呼びかける本先生。先生の医療DXに対する見識の高さもうかがえた



会場からは多くの質問が上がった。中西先生はその一つひとつにしっかり答えていく

*2 英語の「benefit」が語源。「利益」「恩恵」「便益」を意味する。心理的・機能的な利益も含まれる。



笑いをベースにしたコミュニケーションが 医療現場の課題の解消に ～Wマコトのコミュニケーション術～

お笑い芸人から放送作家に転身しテレビやラジオ、CMの企画・構成などを手掛ける一方で、笑いとコミュニケーションを柱に企業や医療機関、教育機関などでの講演・研修を精力的に行っているWマコト*。コミュニケーションが医療安全にもチーム医療にも欠かせないものになっている現在、医療従事者に何を伝えようとしているのか、その思いを聞きました。当日済衆館病院（愛知県北名古屋市）で行われた医療安全講習会の様子とおわせてお伝えします。

ある看護関係者との出会いから その活動は医療・看護分野へ

「お笑いの世界で繰り広げられる芸のなかには、とても質の高いコミュニケーションがあります。笑いの現場を3000回以上体験してきたからこそ分析することができたそのコミュニケーションの法則を、さまざまな分野の方々に知ってもらい、何らかのかたちで役立ててほしいという思いが、研修や講演の活動につながりました」

ツッコミ担当の中山真さんとボケ担当の中原誠さんによるWマコトの2人はこう話します。当初は企業や学校を対象に行っていた活動が医療分野へと広がったきっかけは、ある看護関係者との出会いでした。新聞記事のなかでその人が話していた「医療・看護分野においても笑いとコミュニケーションは大切」という言葉を目にして、医療従事者の活動にも貢献できるのではないかと考えたといいます。

「その方と直接お会いして私たちの思いと活動内容を伝えたところ意気投合。特別にお願いして看護体験をさせていただき、医療・看護業務で求められるコミュニケーションとは何かを体感することがで

きました。さらに医療安全や業務連携などについても学び、私たちが考えたコミュニケーションの法則を医療・看護分野ではどのように生かしてもらえるのか、根拠をもってお伝えできるようになっていきました」（中山さん）

研修を通して2人が 医療従事者に伝えたいこと

現在では多くの医療機関や学会などでも研修・講演を行うなか、Wマコトは医療従事者に向けて何を伝えたいと考えているのでしょうか。中山さんは次のように話します。

「笑いは場の雰囲気をよくし、心地よいと感じられる空間にしてくれます。そんななかにいると人はコンディションが高まり、他者の立場を思いやりたり共感し合ったりしてコミュニケーションを図り、よりよい関係性がつくりあげられるようになる。患者さん、同僚、他職種など常に多くの人とかわる医療従事者の方々が、場面場面で笑顔のあるコミュニケーションを行うことで、困難を乗り越えたり、ステップアップしたりすることにつながり、それがより充実した環境を生み出していくことを伝えたいですね」

「何よりもみなさんに元気になってほしい」というのは中原さん。自分たちの研修により、引きこもりの子が自己表現できるようになったり、いじめっ子といじめられっ子が仲良くなった例などを紹介。「自分たち自身も笑いのパワーに助けられてきました。笑いには何かを打開する力がある。仲間づくりにもつながる。それを医療現場のみなさんにも感じてほしいと思います」と言葉をつなぎました。

Wマコトの思いは、笑いにあふれた同日の講習会のなかで受講者のみなさんに伝わったようです。



Wマコトの2人。（左から）中原誠さん、中山真さん

* 吉本総合芸能学院NSC出身で漫才活動やMC活動などを経て放送作家に。ほかにも、イベントやライブのMC、ラジオパーソナリティなどを務める。これまでの研修・講演の数は1500回以上。CLASSIX株式会社代表取締役。



クイズ形式で質問をしながら受講者のなかに入ってコミュニケーションを実践

済衆館病院では医療安全と感染に関する講習会が年に2回ずつ実施されている



(写真上) Wマコトの講義は会場への声かけからスタート。受講者は一気に雰囲気巻き込まれていく(写真左)講師の紹介をする飯塚宏済衆館病院副院長兼脳神経外科部長



講義の後には質疑応答も行われた。具体的なコミュニケーションの方法についての質問もみられた

研修会レポート

医療法人済衆館 済衆館病院「医療安全講習会」(2024年11月15日開催)

済衆館病院の「医療安全講習会」は2024年11月15日に行われました。受講した職員はおよそ150名。メイン会場にサブ会場を加えたサテライト方式で行われました。当日業務等で出席できなかった人は、オンデマンド配信で講義を視聴します。

同院副院長で脳神経外科部長の飯塚宏さんの紹介で登壇したWマコトの2人は、早速会場に向かって自分たちの仕事である放送作家のイメージについて問いかけました。2人の明るい笑顔での声かけから会場との掛け合いがスタート。そこには、まさに笑顔とコミュニケーションの実践がありました。

●笑いがコミュニケーションをどのように変えていくのか

講義は、テレビなどで活躍するお笑い芸人の話には質の高いコミュニケーション術が存在すること、それがさまざまな分野でも生かせるものであることについての話から始まりました。そして、医療現場で求められる笑いは、幸せやうれしさなどを感じて脳内が心地よい状態になったときの笑い(笑顔)であると話しました。さらに、医療現場ではこの笑いに裏打ちされたコミュニケーション——人を喜ばせる、人を輝かせるコミュニケーションが必要であり、安心・安全につながるとして講義が進められました。

Wマコトは、自ら分析した笑いとコミュニケーションについてのデータをベースに、テレビや舞台で活躍する芸人を例に挙げてクイズを出題し、その答えを会場に問いかけます。それらの質問から「生産性」「共感」「自己開示」「感謝」「失敗」「客観視力」などがポイントとして浮き彫りになり、笑いがコミュニケーションをどのように変え、それがどのような影響をもたらしていくのかが明らか

かになっていきます。その間も、2人と受講者の掛け合いは続き、会場内は明るい雰囲気包まれていました。

●どのような笑いが求められるかを考える笑顔のあるアプローチを

2人は最後に笑いの5原則を提示しました。「安心・安全」「共感」「承認」「楽しさ(緩和)」「善」が目の前の人を笑顔にするための5つの要素。お笑い芸人も用いているといいます。

「人間は年齢を重ねるごとに笑う回数が減るといわれており、1つの例として、子どもは1日平均300回程度笑うのに対し、70歳代では2回になるという報告もあるようです。また、笑顔は極度の緊張やストレスを緩和するために生まれたという説もあります。複雑化、細分化された現代社会で厳しい現場を担う医療従事者のみなさんには、笑顔を重ねることが自分とチームを守ること意識して、笑顔を生むアプローチを心がけてほしいと思います」という中原さんの言葉で講義は終了しました。

講習会を終えて



済衆館病院看護部長
川口万友香さん

飯塚副院長からの紹介でWマコトさんのことを知り、YouTubeなども拝見して、職員にぜひ生で受講してもらいたいという思いから研修を企画しました。この試みは正解でしたね。会場にいた全員が1つの間にか巻き込まれていました。

研修を通し、日常的に職員間のコミュニケーションがうまく取れていないこともあるのではないかと感じました。この研修をきっかけに声かけやすくなり、新たな関係づくりに結びつくことに期待しています。

Let's
看護
みかき

看護の学びに
役立つ情報を紹介します

vol.19



看護実践での「臨床の疑問（クリニカルクエスチョン＝CQ）」を研究テーマとなり得る「研究の疑問（リサーチクエスチョン＝RQ）」にするにはどうすればよいかを体系的にやさしく解説しています。CQ を RQにつなげる文献検索の方法では、医中誌WebやPubMedなど国内外の代表的な文献データベース6種類の使い方をわかりやすく紹介。看護研究の入門書です。

**看護研究における
文献の調べ方・活かし方**

貝谷敏子・平 紀子 編著
日本看護協会出版会
2970円(税込)

ナースが地域の自慢のおみやげをご紹介します！

\自慢の/
おみやげ
Collection

今回の推薦者



聖路加国際病院
看護部長
鈴木千晴 さん

vol.19 | 秋田空港・大館能代空港共同プロデュース
秋田県 | 秋田犬マスコットキーホルダー



イチャ
オン

出身地である秋田が大好き。おいしいものもたくさんありますが、可愛らしさではこれがダントツ。おみやげとして友人にも喜ばれています。秋田犬保存会の会員でもある私のお気に入りです。

1100円（税込）
秋田空港おみやげ広場 あ・えーる 018-886-3366
大館能代空港売店 ANA FESTA 0186-62-5530

ニプロ 医療機器データ通信サポートシステム

HN LINE
Hospital Network Line

携帯情報端末

電子カルテ

データ連携

血糖管理

バイタル管理

輸液管理

連続見守り

血糖

SpO₂ 呼吸数

体温

血圧 脈拍

輸液ポンプ

シリンジポンプ

心拍 心電波形

※一部対応中の内容を含みます。Cocoron は WindowsOS に未対応です。

HN LINE とは？

HN LINE は、離れた場所でも無線通信によって「医療機器情報」を速やかにかつ正確に共有することで患者さんの QOL の向上とリスク管理を行い看護業務の効率化を図り、働き方改革のお手伝いを致します。

この広告に関してのお問い合わせ先

資料請求先  **ニプロ株式会社** 大阪府摂津市千里丘新町3番2-6号

2024年1月作製